

学生時代の食事処

(一) 「学生寮」

大学の三年生までは学生寮にお世話になった。二食付で一ヶ月、四千五百円の寮費は貧乏学生がそのまんま服を着ている様な私にとってはまさにサンクチュアリである。

四月一日に入寮して、四人一部屋の先輩に挨拶も済ませ、最初の食事は月曜日の夕食となり、メンチカツだった。一〇八名の寮生が食堂にドツと押し寄せて食事をとる光景はどこか鶏小屋に似ていて滑稽にも感じたが、知らぬ他国の群馬県高崎市における最初の食事であるという思いが先に立ち、はたまた苦しかった浪人生活からの開放感もあって美味しい事この上ないものだったと記憶する。

学生寮の夕食は曜日ごとにメニューが決まっている。朝食は毎日一緒に納豆と生卵それにタクアンと味噌汁である。以下、曜日毎の夕食メニューを思い出してみる。

月曜日

メンチカツ

火曜日	サンマの開き
水曜日	親子丼
木曜日	シチュー
金曜日	とんかつ
土曜日	炊き込みご飯
日曜日	カレー

日曜日は特別に昼食として松浦屋の「小倉クリームパン」と「栗本牛乳」がついた。チャツカリした奴はいるもので昼過ぎまで寝て暮らす輩の分を失敬して二つも三つもデポする者もいた。冬場はなかなか腐らないから夜食の足しになり大いに助かったものだ。

ともあれ私はこの食事に三年間お世話になった。食生活の大部分を寮の食事により賄って頂き感謝のしようもないが、すべては寮のオジサンとオバサンの愛情に支えられていた。このお二人は群馬を代表するカカア天下のご失婦であったが私には特によくして下さった。

「持山さあくん！味噌汁の上澄みどけてあるよ、ホラッ！」と他の寮生に気遣いながら、そっと私の好きな上澄みを手渡してくれるオバサンは母親以上に母親らしかつ

たのを思い出す。

卒業後も年賀状のお付き合いが続いたが平成十七年にはオジサンが、平成二十年には相次いでオバサンが亡くなった。オジサンが亡くなる三年前に寮の後輩を連れてご夫婦を訪ね食事を誘った時にはオジサン、憚らずにオイオイ泣いて喜んで下さったのが、せめてもの孝行となった。